

小園 崇明・渡辺 哲郎・和田 悠 編著
千葉県歴史教育者協議会 編集協力

『子どもとつくる平和の教室』

はるか書房 2019年 本体1900円(税別)

鈴木 隆弘 (高千穂大学人間科学部)

本書は、千葉県歴史教育者協議会(以下、千葉歴教協)に関わる20代後半から40代前半までの教師による実践集である。この世代は、採用が極端に絞られ、教師になること自体が困難だった世代である。そんな困難を抱えた教師達が、授業の困難を乗り越えるため、頼ったのが、加藤公明の実践であり、子ども中心の「考える日本史授業」であった。「考える日本史授業」は、端的に言えば、暗記型歴史授業を否定し、考える力を育成する授業である。教材や発問を元に、子どもたちに討論させ、歴史的思考力などを獲得させようとする授業だといえる。加えて、本書の実践では、提供される教材は地域から見出されるべきこと、民衆からの視点が子ども達の思考ベースになることなどが前提とされている。

このような加藤の「討論授業」に学びながら、「子どもが主役の社会科」を実現しようとする教師たちの平和教育実践集が本書である。小学校から大学までの実践の他、和田悠による理論的検討、先輩教師へのインタビュー、学校現場における子どもたちが置かれた状況についてのコラム、教師加藤公明に関する座談会などで構成されている。以下、実践のみの目次である。

第1章	なぜ、長野県の人がつくば市まで来て芝畑を作ったのか	石上 徳千代
第2章	教室で出会う沖縄	三橋 昌平
第3章	善良な父や兄弟が、戦地で人を殺めてしまったのはなぜか	板垣 雅則
第4章	浅川巧から見た日本の植民地支配	高橋 珠州彦
第5章	武力で平和は保てるか	鶴田 拳
第6章	戦場に送られた民間人	四十 栄貞憲

第7章	なぜ空襲でも逃げ遅れちゃいけないのか	渡辺 哲郎
第8章	ハジチを禁じられた沖縄女性の葛藤	青木 孝太
第9章	自殺は自己責任なのか	松井 延安
第10章	安房の高校生から始まった平和活動	河辺 智美
第11章	大学生が空襲体験を学び、伝える	小園 崇明

本書の実践は、戦争の実情を暴き立てるいわゆる告発型の平和教育ではない。

なぜ長野県からつくば市に移住してきた人がいたのかから、戦争の時代と今を読み解く授業(第1章:地域教材)、戦場で銃を撃たなかった兵士について考える授業(第3章:民衆の視点から考える授業)、あるいは、侵略された沖縄女性の目線から自分と歴史を考える授業(第8章)などがあり、加えて、社会保障について考える公民の授業(第9章)や、課外活動と地域NPOの連携から生まれた国際連帯活動(第10章)、講義から課外活動へと展開していく大学での平和学習の実践(第11章)など、多岐にわたる実践が紹介されている。

これら実践は、教師になることの困難に加えて、授業をつくる時間がないという現場が抱える教師としての困難をどう打ち破るかについてのヒントとなっている。コラムでは、地域教材の発掘に向けた具体的な方法まで示されおり、地域活動まで射程におく、千葉歴教協が持つ実践と層の厚さがあふれている。

確かに、平和教育といえば、戦争体験者から被害の実情を聞き、二度と戦争はごめんだと確認する授業が多かったかもしれない。しかし、体験者の多くが亡くなられた現在、被害伝承授業は困難をむかえている。このような被害の伝承が途絶える中で、子ども達に対し、どのように平和への意識を育むか。こういった平和教育の困難への挑戦が、本書には詰め込まれている。戦争になりそうな時、民衆はどう考え、抗おうとしたのか。それを考える実践が詰め込まれている。しかし、同時に民衆は戦争を支持したことも忘れてはならない。和田はそれを「性急な価値判断を社会によってつかまされている」抑圧状況とするが、どうすればそれを打ち破れるのか。今後の実践検討が必要だろう。